

「大正期『京都日出新聞』歴史災害記事データベース」解題

山崎 有 恒 (立命館大学文学部准教授)

京都歴史災害史料研究会について

このデータベースを作成した京都歴史災害史料研究会は、2003年度に立命館大学が採択を受けた、文部科学省21世紀 COE 研究「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」の一プロジェクトとして、2004年に創設された研究会である。同 COE 研究の研究拠点メンバーであった山崎有恒（立命館大学文学部准教授、近代日本政治史）が代表となり、歴史学を専攻とする大学院生、学部生を中心に、総合プログラムなど他専攻の学生も多数交え、近代京都の防災問題について歴史学的視点から検討を加えた（現在も活動継続中）¹。

この研究会の目標は大きく二つであり、第一に近代京都において発生した火災、水害などの歴史災害の実態について、歴史史料を読み込むことで、確定、復原していくこと、第二にそうした作業を通じて、「人間と災害の関係」が近代京都においてどのように変化したかを、明らかにしていくことであった。

そのために同研究会には二つのプロジェクトが進められた。一つは近代京都歴史災害史料研究プロジェクトであり、もう一つは京都の歴史災害に関するオーラルヒストリー研究プロジェクトである。今回お届けする「大正期『京都日出新聞』歴史災害記事データベース」は前者の成果の一部をまとめたものであり、2004年度～2007年度にかけての研究成果が反映されている²。

データベースの概要

本データベースは、大正期の『京都日出新聞』中より、各歴史災害に関する記事を収集し、エクセルの表を用いて整理したものである³。

収集した記事は、1) 火災、水害、地震など、発生した災害の実態を示す記事はもちろん、2) 防災のための制度、施設、設備に関する記事、3) 災害と関わる都市計画に関する記事、4) 広く人間の災害に対する考え方を示す記事など、様々なジャンルに渡っている。それぞれの記事が、どのジャンルに所属し、どの採択基準により掲載されたものであるかは、データベース中に記号で示してある⁴。

データベースには、記事が掲載された年月日（夕刊発行以降は朝夕刊の区別も）、記事の要旨、備考欄を記録した。一般に、災害に関しては状況説明を含めかなり長文の記事が掲載されることが多く、その全文を掲載することは難しいため、なるべく要点がつかめるように、要約を行った。その際、1) 災害の発生年月日、時間、2) 発生場所と原因、3) 収束に至るまでの経過、の三点については、なるべく丁寧に盛り込むよう心がけた。

また、記事中、近代における「人間と災害の関係」の変化を読み解くという、本研究会のメインテーマを考える上で重要と思われる記事については、その全文を翻刻の上、別途「大正期京都歴史記事資料集」というタイトルを付し、『京都歴史災害史料研究会報告書 vol. 1』（2008年3月発行）に掲載している。それら記事については、データベース中の備考欄に「資料集に収録」という記載がなされているため参照されたい。

尚、災害に付き、多くの記事が繰り返し書かれるような場合（特に大水害の場合こうした傾向が顕著である）、備考欄に「以下、○月○日、×月×日に続報あり」という形で、一括収録している場合がある。本データベースを用いて、ある災害に関しての記事を収集しようとする時は、特に留意して欲しい。

大正期の『京都日出新聞』を選んだ理由

今後本研究会では、明治期、昭和期の『京都日出新聞』や、他の史資料類についても同様の研究を加えていく予定であるが、今回特に大正期の『京都日出新聞』を素材として選んだ理由について、簡単に解説しておきたい。

まず『京都日出新聞』を選んだ理由であるが、戦前期京都で発行された新聞の内、現在の『京都新聞』の前身にあたる同紙だけが、明治期～昭和期までを広くカバーする唯一の地方紙であることがあげられる。

その内、大正期を選んだ理由については、詳しくは先に紹介した『京都歴史災害史料研究会報告書 vol. 1』に掲載された拙稿「転換期としての大正」をごらんいただきたいが、大まかに言って、この時代こそが「人間と災害の関係」を大きく変えた転換期であると考えたことによる。大正期は、「文明」の名のもとに、西欧科学技術を導入しての災害克服が強く叫ばれた時代であり、それに呼応するように消防署などの防災制度、蒸気ポンプなど施設や設備が次々と導入され、それまでの防災のあり方が大きく変容した。この時代の新聞記事を丁寧に読み込むことで、そうした変化を読み取ることが出来るのではないかという山崎の仮説に基づき、作業は進められたのであり、このテーマを選んだすべての責任は私、山崎有恒が負うものである。

研究経過と本データベースの作成過程、ならびに謝辞

2004年の発足以来、多くのメンバーが参加した本研究会であるが、その作業は、1) 参加メンバー各自による新聞閲覧、記事収集、研究と、その成果報告会を兼ねた、2) 毎月一回開催の研究会の二つにより行われた。研究会では収集した記事のエクセル表、その記事を採録した理由、特に興味深い記事の紹介などを参加メンバー全員がレジュメを用意して報告、全員の討議により採用、不採用を決定した。また先述した資料集行きの記事もここで採択が決められた。

本研究会の運営は、三人の幹事が担った。初代幹事柴山礼子はエクセル表のフォーマットを作成するなど、本研究会の枠組みを決める重要な役割を果たした。2005年度末に同氏が伊勢市史編纂室嘱託として赴任した後は、二代目幹事藤野真拳（立命館大学大学院文学研究科院生）がその職務を引き継いだ。共に大学院生として多忙な日々の中、本研究会のために多大な貢献をしてくれたことに対し、厚く御礼申し上げたい。

その後運営は三代目幹事田村悠に委ねられ、本データベースの作成に関する最終的な編集作業、微調整はすべて田村の指揮の下で進められた。一番面倒な作業を引き受け、地道に完成に導いてくれたことは、すべて同氏の努力のたまものであり、心より感謝している。

その他のメンバーもみな私、山崎の呼びかけに応じて手弁当で集まってくれた方ばかりで、時には図書館で真っ黒な紙面と悪戦苦闘しながらこつこつと記事データを作成し、月一回の研究会が行われる土曜日には、朝からレジュメを携えて共同研究室に足を運んでくれたこと、感謝している。エリアマップを自発的に作成してくれた有本香織、いつも秀逸なコラムで沸かせてくれた日比真梨子、冷静沈着さが光った吉田真澄、スーパーサブとして大活躍した清水明日香など、メンバー全員についてひと言ずつお礼の言葉を述べたいところではあるが、紙面の都合もあり、割愛させていただくことをお許し願いたい⁵。

総じてこの研究会は、時に安全こたつからの出火をめぐって大爆笑が起きるなど、明るく楽しい雰囲気の研究会であった。積極的に参加して、盛り上げていただいたメンバー各位に、この場を借りて心より御礼を申し上げたい。

註

- 1 この研究会のHP（現在は閉鎖中）作成にあたっては、赤澤みさき（立命館大学大学院応用人間研究科院生）の協力を得た。ここに付記し、御礼申し上げたい。
- 2 なおこの間2006年度末に、立命館大学は文部科学省に対して、21世紀COEプログラムによる研究拠点辞退を申し出たため、2007年度の本研究会は、立命館大学「歴史都市防災研究プロジェクト」の一部となり、同プロジェクトの資金により運営されたことを付記しておきたい。
- 3 この表のフォーマットは、初代幹事であった柴山礼子（立命館大学大学院文学研究科院生、当時）によって作成された。
- 4 分類記号一覧については、三代目幹事田村悠（立命館大学文学部学生）の手による「凡例」に一覧表を掲げてあるため、そちらを参考にされたい。
- 5 本研究会の成果をふんだんに盛り込みながら、朝田健太が優秀な論文を執筆し、研究者への道を歩み始めたことは、嬉しい出来事であった。今後の精進により、この分野の研究を大きく前進させてくれることを期待したい。